

第2章 個別調査の概要__生態系__河川形状（横断測量）

1 調査内容

(1) 調査の目的

ダム撤去による影響は小さいと予測されたが、予測に使用した降水量や降雨のタイミング等については不確実性があるためモニタリング調査を実施する。また、河川環境を把握するための基本的な項目であるため、ダム撤去工事及び撤去後において減水区間、下流流水区間の河川横断の状況を把握するとともに、貯水池内の流水環境に変化する地点については、横断・縦断・平面の状況を把握する。

(2) 調査日

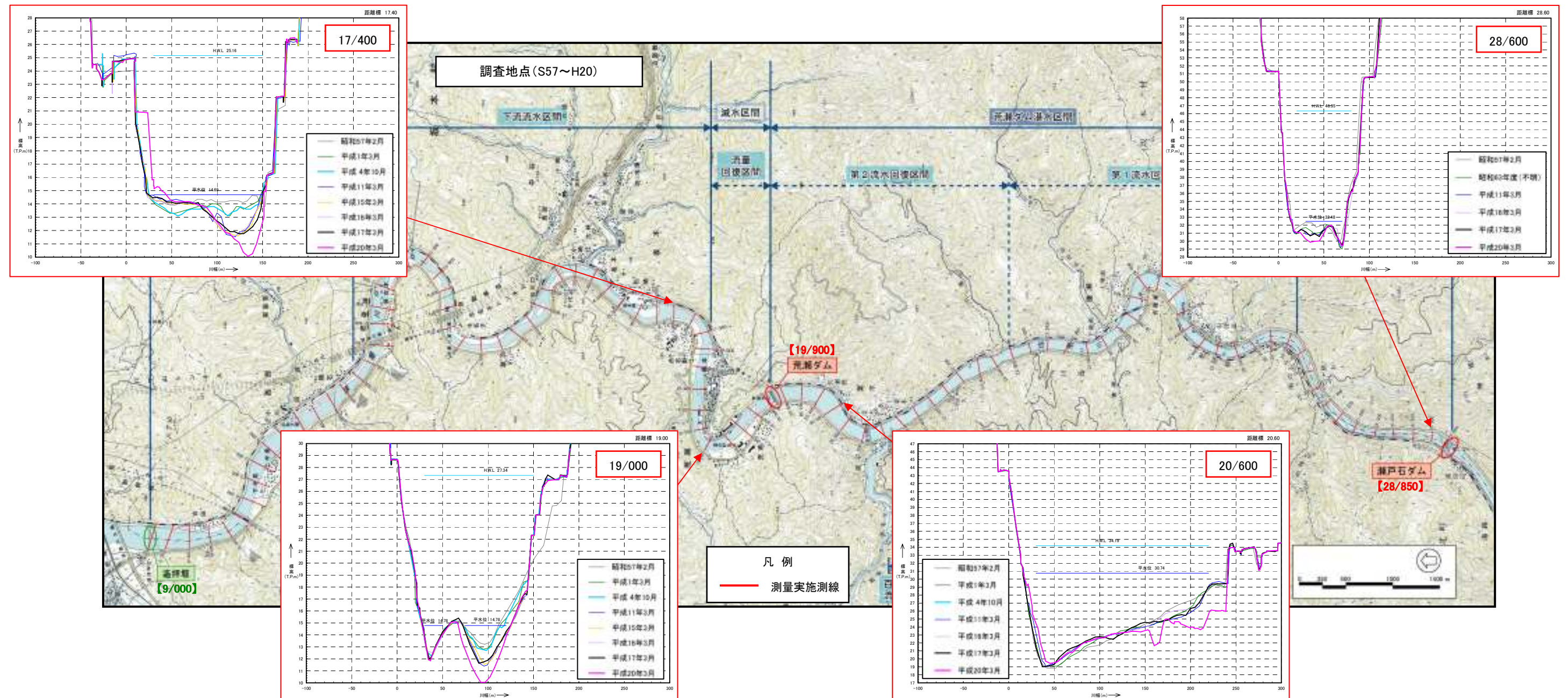
国土交通省八代河川国道事務所が昭和 57 年度から平成 20 年度まで実施。熊本県企業局が平成 16 年度から 22 年度まで実施。

(3) 調査地点

過去に河川横断測量が実施されている各測線（瀬戸石ダム～荒瀬ダム:250m ピッチ、荒瀬ダム～遙拝堰:200m ピッチ）を基本とした。

2 調査結果①（昭和 57 年～平成 20 年）

- (1) 昭和 57 年～平成 20 年の全体的な傾向として、遙拝堰湛水区間、下流流水区間、減水区間では、概ね河床高が低下する傾向が見られた。なお、荒瀬ダム下流部(19/400、19/800)では、河床高が上昇する傾向が見られた。
- (2) 昭和 57 年～平成 20 年の全体的な傾向として、荒瀬ダム湛水区間では、概ね河床高が上昇する傾向が見られた。なお、近年の平成 17 年～20 年にかけて、一部(20/400、20/600)で堆積土砂の掘削による河床高の低下が見られた。
- (3) 昭和 57 年～平成 20 年の全体的な傾向として、上流流水区間内では、瀬戸石ダム下流部(28/400～28/800)で河床高が低下する傾向が見られた。



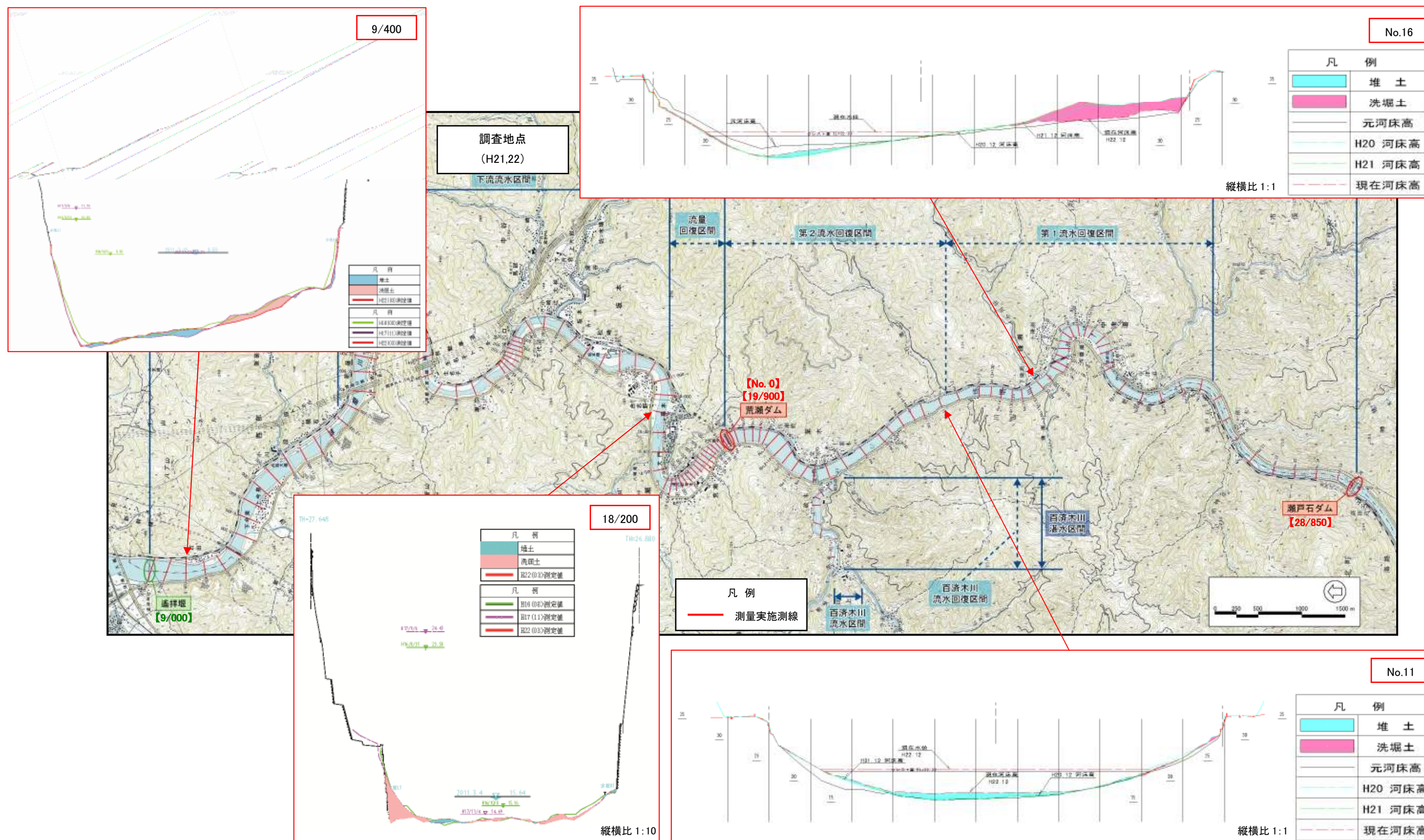
2 調査結果②（平成 21 年と平成 22 年の比較）

<参考資料>

- ・ダム下流：P29～42
- ・下代瀬：P43～47
- ・ダム直下：P49～57
- ・ダム上流：P59～80

(1) 鎌瀬川流入部直下 (No.16) では、鎌瀬川の流入する右岸側で顕著な洗掘が見られた。

(2) 第 1 流水回復区間と第 2 流水回復区間の間では、行徳川流入部前後の川幅がやや狭くなる箇所 (No.11～13) で中央部に堆砂する傾向が見られた。



※この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(坂本、中津道)を背景図として使用したものである。